

令和 8 年度入学 盛岡短期大学部 一般選抜 国際文化学科 試験問題の出典

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文		吉田 直哉	私は命のパンである ―― アンパンマンからの倫理学	『學鐙』第 121 巻 第 4 号 2024 年 pp.12-15 より 一部改変	丸善雄松堂

令和 8 年度 一般選抜

短期大学部

小 論 文 (90 分)

学 科・専 攻 名	ペー ジ
生活科学科 生活デザイン専攻	1 ～ 3
生活科学科 食物栄養学専攻	4 ～ 5
国際文化学科	6 ～ 8

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 志望する学科・専攻により問題並びに解答用紙が異なるので注意しなさい。
- 3 この問題冊子は 8 ページあります。なお、下書き用紙が 2 枚あります。
- 4 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督員に知らせなさい。
- 5 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 6 解答用紙(各学科・専攻別)には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 7 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 8 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 9 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

アンパンマン。絵本作家やなせたかしが半世紀前に生み出した国民的ヒーロー。その知名度は時の宰相をはるかに凌ぐ^{しの}であろう。アンパンマンは、パンである。つまり、食べ物である。ヒーローが食べ物という設定は、類例を見ない。動物のヒーローが数多^{あまた}あることと比べると、その設定の異様さは明らかである。しかも、アンパンマンは弱い。必殺技を持たない。超人技を持たない。それゆえ、凶悪な〈敵〉を殺戮^{さつりく}することができない。なぜか。それは、作者のやなせの正義は、〈敵〉の抹殺には無かったからである。〈敵/味方〉を厳密に二分することなどできないと彼は信じていたからである。

やなせは、日中戦争に従軍した。終戦は、上海近郊で迎えている。敗戦に近くなると、すさまじい飢餓に苦しめられた。人間が味わいうる、最も耐えがたい苦痛こそが空腹であるという確信が、彼の肺腑^{はいふ}に突き刺さる。さらに、唯一の肉親^{ちひろ}と言っていい弟千尋を、戦争で失っている。京都大学進学後、海軍尉官となった千尋は、終戦の8ヶ月ほど前、乗艦していた駆逐艦が米潜水艦の雷撃を受け沈没、バシー海峡に散った。ほどなくして終戦。弟が死をもって報いんとした「大義」は瞬く間に瓦解した。皇国のために命を捧げる、それは無駄死にであったと。弟の死は無意味であったのか。戦後も永く、やなせの自問は続いた。

アンパンマンがパンであり、顔をちぎる、つまり自らを傷つけてまで空腹のともがらを救い癒やそうとすることは、言ってみれば、やなせ自身の戦争体験^{ネガ}の陰画である。つまり、自身の飢餓と、弟を死に追いやった「不完全な正義」の陰画。餓えと渇きを救おうとすることは「絶対的な善」であり、それはひっくり返らない。消え去った皇国の「大義」とは違うのだ。そして、さらにやなせは、「無力」「非力」という、自分自身の特性をアンパンマンに与える。アンパンマンは、無力である。アンパンマンは、非力である。ここには、やなせの自画像が投影されている。34歳のやなせが三越百貨店の宣伝部を退職してフリーランスになってから、アンパンマンがアニメ化されテレビ放映がはじまり、クリエイターとしてスターダムに上り詰めるまで実に35年。古稀が目前に迫っていた。永すぎる不遇時代。彼は、戦後の漫画界を彩った、綺羅星^{きらぼし}のごとき超人的な才能たちに打ちのめされ続けた。とりわけ、手塚治虫。自分は天才ではない。超人にはなれない。なりようがない。これが、やなせのセルフイメージの真ん中に巣くうことになる。無能で非力である以上、自ら以外に差し出せるものはない。献身するよりほかない。アンパンマンは無能、非力である点で、やなせの分身である。無能で非力な存在であってもなせること、それは自らを傷つけてでも、他人を喜ばせようとする事なのだ。「たとえ、胸の傷がいたんでも」。

無能であるゆえに、非力であるゆえに、他者に自らを差し出すほかになく、自らを差し出すことによってのみ、他者とつながることができ、そこにこそ幸福を感じうる。これが彼の人生の指針となる。唯一の肉親である弟を戦争で亡くし、孤独の身であったやなせを支え続けた伴侶^{のぶ}暢を1993年に喪^{うしな}う。それ以降、彼は、ノーギャラ^{注1}で様々な仕事を引き受け続ける。誰かに、喜んでほしいから。それが、自分にとっての最高の喜びだから。実子の無かったやなせにとって、アンパンマンはまさに自らの「子」であり、その「子」が、多くの子どもたちを喜ばせていることに、幸福を感じ続けた。

それは献身の悦楽であった。

アンパンマンが私たちに問いかけていることごとについて、今少し立ち止まって考えてみよう。1つは、アンパンマンが与えるのが〈顔〉であるという点、もう1つは、顔を食べさせることが、見返りを求めない、無償の〈贈与〉であるという点である。〈顔〉と〈贈与〉。これらは共に、現代思想の中心的な概念であり続けてきた。

〈顔〉は、自分の一部でありながら、〈私〉には捉えられない。自分の〈顔〉は自分には見えない。つねに他者のまなざしに晒^{さら}されている。〈顔〉を見るとき、他者との関わりが不意に立ち上がってくる。つまり、〈顔〉を見られるとき、すなわち同時に他者の〈顔〉を見るとき、私たちは他者を否定できなくなり、目の前の他者が、〈私〉に応答することを迫ってくる。エマニュエル・レヴィナス^{注2}は、〈顔〉を見ること、〈顔〉を見られることは、〈私〉の外部に在る他者への応答を不可避に求めてくると考えた。レヴィナスによれば、〈顔〉は、絶対に〈私〉の中に閉じ込められることのないものであり、つねに他者という外部へと差し向けられている。つまり、顔は、〈私〉の一部でありながら、〈私〉ではない。顔が、〈私〉の中からこぼれだし、他者と出会う時、そこで「責任」、すなわち^{レスポンスビリティ}応答可能性が生じてくる。アンパンマンの振る舞いは、まさに、自らの〈顔〉が〈私〉ではなく、他者に差し向けられたものであり、最も〈私〉らしい部位である〈顔〉を、他者の一部となるべく贈与することによって、〈私〉を他者に対して開いていくのである。アンパンマンが食べさせるのは、腕や脚では駄目なのだ。アンパンマンが出会う他者とは、空腹に苦しむ人間である。応答＝責任を求める人間である。〈顔〉を差し出すということは、他者からの応答の求めに、最も直接的に応じるということである。〈顔〉以外に与えるものを持たない存在。〈顔〉は他者に差し出され、他者によって食べられることで、〈顔〉という〈私〉は他者となる。やなせの幸福は、ここにあったのだろうか。

アンパンマンが顔を差し出すとき、返礼は期待されていない。つまり、アンパンマンが顔を与え食べさせることは、一方向の、贈与としてなされている。贈与されるものが自らの身体の一部であるから、それは自己の贈与であるともいえる。ジョルジュ・バタイユ^{注3}によれば、贈与は、交換と対比される。交換と違って、贈与は返礼を求めないがゆえに、贈与した側と、贈与を受けた側を結びつける。贈与を受けた側が、「負債」を感じるからである。しかも、その贈与が自己の贈与としてなされる時、贈与する側の自己は失われる。それは、〈死〉の贈与ということもできるだろう。〈死〉の贈与として、自己の贈与を一方的に受けた側は、返礼することが絶対的に不可能となる。相手は〈死者〉なのだから。その時、被贈与者は自問するだろう。1回限りの、かけがえのない贈物を、〈死〉として贈与された。とてつもない負債。それにどのように報いるべきか。このような煩悶^{はんもん}の中から、被贈与者は、自らが新たに贈与者になる方法を探り始めるに違いない。そして、自らを贈与したい、報いることのできない返礼として自らの命を懸けることこそが、自らを輝かせることに思い至るであろう。その輝きは、自己犠牲によるがために苦しみでありながらも、比類のない悦楽を生じさせる。自己の一部が他者の一部となり、両者の境界が無効化され、融合するという悦楽。自己を失うがゆえに、他者と合一するという悦楽である。やなせは、弟千尋、妻暢から、〈死〉を贈与されたのだろうか。〈死〉の贈与によって、死者は忘却から自らを解放することができる。〈死〉の贈与によって、アンパンマン

は自らの存在を消去し、それによって、他者の内に自らを蘇^{よみがえ}らせるのである。

レヴィナスとバタイユという、現代思想の巨人の思索に抛りながら、アンパンマンが投げかけるメッセージを汲み出そうと試みてみた。「顔を与える」という設定の背景には、繰り返すが、「行為によって他者に応じることができない」、「顔以外に与えられるものがない」という無力、あるいは無能が厳然として置かれている。そして、やなせによれば、この無力、無能ゆえに、アンパンマンは普遍性を有する。つまり、それは、無力である人間、無能である人間、すなわち、超人的能力をもたない人間、天才でない人間のための倫理を開示してくれている。無力であり無能であるアンパンマンという偶像是、単にやなせの自画像なのではなく、私たち(凡人)のアレゴリー^{注4}でもある。

ただ、「アンパンマンは、つねに私でもある」というやなせの問いかけは重い。私たちは皆、アンパンマンでないことはできない。応答を要求してくる他者、すなわち腹を空かせた子どもの求めを、自らが無能であり、無力であることを言い訳にして、拒むことはできないからである。自らが無能であり、無力であることは、他者との共生から逃げる口実にはならない。無能・無力であっても、否むしろ、そうであるがゆえに、他者への応答責任が生じてくるのである。有能・有力な人間は、独立独歩して生きてゆけるかもしれない。しかし、無能・無力な人間はそうはいかない。無能・無力であるがゆえに、他者と繋がらねばならない。顔を欠いたアンパンマンが無様^{ぶざま}であるように、無能・無力をさらけ出すことは恥ずかしい。しかし、無能・無力であるがゆえに、自らの存在そのものを相手に贈与しようとする時、そこには、自らを欠損させたがゆえの愉悦が湧き上がるのである。最晩年のやなせの(献身)は、まさにその快樂のなさせる業であったように思われてくるではないか。

そしてやなせは問う、「なんのために生まれて、なにをして生きるのか」。

(吉田直哉「私は命のパンである——アンパンマンからの倫理学」『學鐙』第121巻第4号、丸善雄松堂、2024年、pp.12-15より、一部改変)

注1 ノーギャラ：無報酬で働くこと。

注2 エマニュエル・レヴィナス：フランスの哲学者(1906-1995)

注3 ジョルジュ・バタイユ：フランスの哲学者・作家。(1897-1962)

注4 アレゴリー：比喻の一種。

問1 下線部「(死)の贈与によって、死者は忘却から自らを解放することができる」とは、具体的にどういうことか。本文の叙述に従い、理由も含めて125字以内で説明しなさい。

問2 本文では「アンパンマン」を通じて自己と他者との関係性が述べられているが、あなたは、私たちが「他者と深くつながる」ためには何が必要と考えるか。あわせてその意味についてどう考えるか。筆者が汲み出そうとしたアンパンマンが投げかけるメッセージを踏まえつつ、具体例を挙げて700字以上800字以内で述べなさい。